

筑波大学社会・国際学群国際総合学類  
卒業論文

学生ボランティアの経験が進路選択に与える影響  
ー学生国際協力団体を例にー

2020 年 1 月

氏 名：大久真実  
学籍番号：201610350  
指導教員：関根久雄

## 目次

|                                                                     |    |
|---------------------------------------------------------------------|----|
| 第1章 序論.....                                                         | 1  |
| 1. 研究目的・研究背景 .....                                                  | 1  |
| 2. 研究方法 .....                                                       | 3  |
| 第2章 ボランティア概念と学生ボランティア.....                                          | 5  |
| 1. ボランティア概念.....                                                    | 5  |
| 2. ボランティアの参加動機と機能.....                                              | 6  |
| 3. 学生ボランティア活動の状況 .....                                              | 9  |
| (1) 学生のボランティアの参加動機.....                                             | 9  |
| (2) 学生のボランティア参加後の変容 .....                                           | 10 |
| 第3章 進路選択への影響の分類.....                                                | 13 |
| 1. インタビュー対象団体と対象者の概要.....                                           | 13 |
| 2. 国際協力ボランティアへの参加動機 .....                                           | 17 |
| 3. 進路選択パターンの3つの分類.....                                              | 19 |
| (1) 今後も国際協力や途上国開発を仕事にする(予定の)ケース(B・F).....                           | 19 |
| (2) 今後、国際協力や途上国開発を仕事にしない、ただし進路選択の1つの選択肢となったケース(G・H・I・J・O) .....     | 22 |
| (3) 今後、国際協力や途上国開発を仕事にせず、進路選択の際も選択肢とはならなかったケース(A・C・D・E・K・L・M・N)..... | 25 |
| 第4章 学生ボランティアと進路・キャリアとの関係性.....                                      | 32 |
| 1. ボランティア活動が進路に与える影響の要因.....                                        | 32 |
| 2. 学びや価値観の変化と社会への適応 .....                                           | 35 |
| 第5章 結論.....                                                         | 41 |
| 注.....                                                              | 45 |
| 参考文献.....                                                           | 46 |
| Summary .....                                                       | 48 |
| 謝辞 .....                                                            | 50 |

## 図目次

|     |                           |    |
|-----|---------------------------|----|
| 図 1 | 先行研究におけるボランティア動機概念.....   | 10 |
| 図 2 | インタビュー対象者のボランティア参加動機..... | 17 |
| 図 3 | 国際協力ボランティアと進路選択の関係性.....  | 41 |

## 表目次

|     |                            |    |
|-----|----------------------------|----|
| 表 1 | クラリーによって作成された VFI モデル..... | 7  |
| 表 2 | インタビュー対象者の概要.....          | 15 |

# 第1章 序論

## 1. 研究目的・研究背景

ボランティア元年と呼ばれた1995年の阪神淡路大震災からこれまで、たくさんの学生がボランティアに参加している。今日では、個人的にボランティアに参加する学生はもちろん、大学のサークルや学生団体の課外活動、授業の一環においてもボランティア活動が行われ、分野は災害、社会福祉、教育、スポーツ、国際協力など多岐に渡る。学生のボランティアの参加動機については分野ごとに異なるものの、「困っている人を助けたい」という利他的な理由だけではなく、自己成長や自己実現の場として捉えている場合も多い。実際にボランティアに関する先行研究の中でも、ボランティアをする人へのポジティブな影響が明らかにされており、内海はボランティアを考える際に重要なことは、ボランティア活動とは、相手を助けることと同時に自分が相手から受け取るものがあるという点である[内海2014:16]と述べている。しかし、以前ボランティアは「奉仕活動」や「自己犠牲」の意味合いが強く、人々の中でボランティアと自己実現が結びついたのは1990年以降のことであった。1998年にはボランティアの教育的意義が認められ、小・中・高等学校学習指導要領の改訂によって、ボランティア活動が教育課程の中に組み込まれるようになった。また、文部科学省の中央教育審議会は2001年に文部科学大臣より「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」の諮問を受け、2002年に答申<sup>(1)</sup>を行った。その中で、18歳以降の青年にとってのボランティアの意義について次のように述べている。

社会人に移行する時期ないしは社会人として歩み出したばかりの時期に、地域や社会の構成員としての自覚や良き市民としての自覚を、実社会における経験を通して確認することができる。また、青年期の比較的自由にまとまった時間を活用して、例えば、長期間の奉仕活動等に取り組んだり、職業経験を積んで再度大学等に入り直したりなど、実体験によって現実社会の課題に触れ、視野を広げ、今後の自分の生き方を切り開く力を身に付けることができる。

また、特に、学生にとっては、何を目指して学ぶかが明確になって学ぶ意欲が高まり、就職を含め将来の人生設計に役立てることができる。

ボランティアの機能において、ボランティアをする側へのインパクトが大きな意味合いを持つことが認められると、学問の分野でもボランティアをする人への効果に着目した多くの研究が登場した。例えば伊藤は、ボランティア活動は心理学的観点からは「援助行動」の1つの形態と見なすことができる[伊藤 2011:36]と述べ、社会心理学者の高木は援助行動に至る一連の流れを、援助者と非援助者の視点から、援助要請、援助授与、援助受容、非援助者・援助者への効果、援助への動機づけに分けてモデル化した。その中で被援助者に与える効果を「援助効果」、援助者自身に与える効果を「援助成果」と概念化した[高木:1997:14]。

学校教育への導入も相まって学生によるボランティア活動が浸透すると、学生自身への影響における研究も徐々に見られるようになった。中央教育審議会は学生時代のボランティア活動は就職を含めた自分の将来設計の手助けにもなる、つまりキャリアに影響しうると述べている。しかし古田によると、学生時代の諸活動（勉強、サークル、アルバイト等）に対する意味はその個人のキャリアの意味に大きく影響すると考えられるものの、学生時代の諸活動に対する意味を扱う研究は数少ない[古田 2018:1]。また就職活動において、面接で多くの学生が「学生時代に頑張ったこと」を問われ、そこから学生の価値観や能力が測られる。筆者自身、就職活動の中では多くの学生がそのエピソードとして課外活動を選び、語っているのを耳にした。そこからも学生時代の課外活動はその後の進路選択やキャリアに少なからず影響があるのではないかと考えられる。特に、課外活動の中でも学生によるボランティア活動は、奉仕活動や地域貢献といった側面と同時に、学生自身がその活動から学びを得るという体験学習としての側面がある[黒沢 2008:12]ため、学生がボランティア経験から成長や様々な気づきを得て、それを進路選択の材料にしていることは明らかである。

そこで本稿では、実際に学生団体やサークルの一環で国際協力ボランティア活動を行っている学生にインタビューを行い、その経験がどのように自身の進路選択に影響を及ぼしているかを明らかにする。国際協力という分野に焦点を当てる理由は、他のボランティア分野と比べ、海外・主に途上国で活動することが多く、渡航前のイメージや期待と渡航後の気づきのギャップが大きいという点からもその後の国際協力における考え方、あるいは自身の将来の方向性に大きく影響しうると考えられる点にある。以上のことから国際協力ボランティア経験が学生の進路選択にどのように作用するかを、インタビューを通して明らかにする。

## 2. 研究方法

本稿は、ボランティア条件や参加動機、学生ボランティアに関する文献および学術論文、ウェブサイト等を参考にしながら研究を進める。また、今回取り上げるインタビューでは、大学在学中に学生国際協力団体に所属し、学生ボランティアとして実際に現地に行って活動を行った経験があり、且つ卒業後の進路が決定している学生 15 名を事例とする。

本稿が意味する学生国際協力団体とは、学生が主体となって国際協力を行っている団体である。また国際協力に関しては、明確な定義は存在しないものの、例えば日本の政府開発援助（ODA）の実施を担う独立行政法人国際協力機構(以下 JICA)は、国際協力を「国際社会全体の平和と安定、発展のために、開発途上国・地域の人々を支援すること<sup>(2)</sup>」と定義している。下村は、途上国の人々の間に、“より良いと思う状態”に移行しようとする行動が広く見られることに注目し、「そうした試みに対する国際社会の支援」と定義している[下村 2009:17]。また、国際協力事業団は、国際協力について「相互依存関係にある現代の世界のなかで、政府あるいは国民がそれぞれの立場で、国を超えて一つの目標に向けて活動すること」と述べ、「人」、「もの」、「金」の3つの観点から国際協力について整理を行っている。例えば途上国への技術協力や協力隊の派遣、緊急援助などは「人」の協力、無償資金援助や開発協力事業は「金」の協力、貿易振興に関する活動は「もの」の協力を担っているという[国際協力事業団 1995：226]。国際協力事業団は、国際協力の定義において途上国を対象とした、というようなことは述べていないが、上の3つの例で挙げている要素を見てみると主に途上国に向けた支援のことを述べている。また、仕事として国際協力を捉えてみると、国連機関や JICA、開発コンサルティング、NPO、NGO など、ある国やある地域、そしてその人々がより良い生活を手に入れることを目的に様々な事業を行い、実際の対象となるのはいわゆる発展途上国となっていることが多い。例えば UNICEF<sup>(3)</sup>は「すべての子どもの権利が実現される世界をめざして」をビジョンに、途上国と呼ばれる地域の子どもたちに様々な支援を行なっている。本稿では国際協力について以上の定義を参考にしつつ、職業の文脈で捉え、国際協力を「国際社会の平和と安定、発展のために人、もの、金を使って途上国の人がより良いと思う状態にするために支援すること」と定義する。

国際協力ボランティアにおいては、ボランティアは単純に他者のためだけではなく、ボランティアをする側も内的報酬を得ることができることから自身の成長などを目的にボランティアを行っている人も含む。

以下本稿の構成を述べる。第2章では、ボランティアに関する先行研究より必要な条件をまとめ、本稿でのボランティアの定義付けを行う。その次にボランティア活動の参加動機や機能について先行研究をもとに整理する。そしてボランティアを行う側の対象者を学生に絞った先行研究から、学生の参加動機、またそこから得られる自身への影響を述べる。第3章では国際協力ボランティアを経験した学生へのインタビュー結果から進路選択のパターンの分類をし、それについて述べる。第4章では進路決定において影響を与えた要因の整理、またボランティア活動を通じた学びや価値観の変化とそれがいかに社会で生かされるかについてグローバル人材の点から述べる。第5章では以上の内容を受けて、本稿の目的における結論と今後の課題について私見を述べて結論とする。

## 第2章 ボランティア概念と学生ボランティア

### 1. ボランティア概念

ボランティアはラテン語のVoluntas(自由意志)を語源とし、辞書では「ボランティア volunteer」とは有志者、志願者、志願兵などの意味を持つ。一般的にボランティアの必要条件と呼ばれているのは「自発性」「非営利性・無償性」「公共性」であり、この自発性はボランティアの意味にも通ずる。自発性とは自分自身の意志で行動を起こすことであるが、内海は自発性に含まれる責任を考慮し、ボランティアにおける自発性とはもう少し消極的に考えて、人や状況による押しつけや命令ではないことを意味していると考えべきであろう[内海 2014:8]と述べている。2番目の条件である非営利性・無償性とは、ボランティアを行う目的を経済的な見返りとししないことである。3番目の条件、公共性とは、ボランティア活動が自己のみの利益ではなく社会的に意義（公共性）がある活動であることを示している[岡本 2014:25]。この3つ以外にも、創造性や先駆性、相互性、自己成長性、継続性など様々な条件がボランティアには存在する。例えば自己成長性とは、ボランティアをする人自身が活動を通して自己発見や自己成長を感じることであり、多くの学びやネットワークの広がりを得ることで生きがいの発見にもつながる。

しかし近年では、交通費の支給や対価を受け取る有償ボランティアの存在や、学校教育への導入がされることによってボランティアの形は多岐に渡り、その概念はさらに複雑化している。その歴史を辿ってみると、日本では過去にボランティア活動を「奉仕活動」と訳したこともあった。このため、現在も「奉仕活動」としてのニュアンスが根強く残っている[岡本 2014:24]ことから、一般的にボランティアは「他者や社会のために行うもの」と考えられる。しかし伊藤は、今や様々な分野で、様々な形態でボランティア活動が行われていることを踏まえると、「他者のため」という動機だけでボランティア個人が活動していると単純に考えることはできない[伊藤 2011:36]と述べている。以上のことを踏まえて伊藤は、ボランティアを、「個人的な関係を持たない見ず知らずの他者のために、強制されなくても自分の意思で、見返りを求めずに行う行為」[伊藤 2011:36]と定義した。また国の審議会や省庁の定義において、中央教育審議会<sup>(4)</sup>は2002年の答申の中で、ボランティア活動を「個人が能力や経験などを生かし、個人や団体が支え合う、新たな公共に寄与する活動、具体的には、自分の時間を提供し、対価を目的とせず、自分を含め他人や地域、社会

のために役立つ活動」と可能な限り幅広くとらえている。また厚生労働省<sup>(5)</sup>は、「ボランティア活動は個人の自発的な意思に基づく自主的な活動」と捉え、「活動者個人の自己実現への欲求や社会参加意欲が充足されるだけでなく、社会においてはその活動の広がりによって、社会貢献、福祉活動等への関心が高まり、様々な構成員がともに支え合い、交流する地域社会づくりが進むなど、大きな意義を持っています」と、ボランティアに含まれる様々な条件にも触れている。

本稿では時代によっても変化する様々な特性を含むボランティア活動を、以上のような定義を参考にして、「自らの自発的な意思で行う、金銭的な対価を主たる目的としない、他者や社会のため、かつ自らの成長になりうる活動」と大きく捉えることとする。

## 2. ボランティアの参加動機と機能

これまでのボランティア活動の研究で重要視されてきたのはその参加動機である。桜井によるとボランティアの参加動機には3つの分析的視覚があるという。第一に自分の利益にならない他人事を進んで行う姿勢である利他主義的動機アプローチ、第二に個人の利己的な満足感を目的とする利己主義的動機アプローチ、そして利他的・利己的以外の要因も含む複数動機アプローチである[桜井 2007:23-31]。複数動機アプローチでは、人々は複雑な動機によってボランティア活動に参加し、さらにその動機構造を構成する種類や強弱は、人それぞれであると考えられている[桜井 2007:31]。複数動機アプローチの代表的なモデルには、クラリーによる心理学の機能的アプローチに基づいた、VFI (the Volunteer Functions Inventory) モデルがある[clary 1998]。機能的アプローチとは、人間の態度を心理学的動機要因として幾つかの機能に分解して理解する考え方である[桜井 2002:112]。クラリーはボランティアの参加動機に関する既存の研究をもとに、ボランティアの参加動機として6つの要因を想定し、それぞれ5項目の30項目から構成したVFIモデルを開発した。その信頼性や妥当性に関しては、すでに米国のボランティア活動参加者を対象として確認されている[板野 2002:24]。VFIモデルの1つ目の要因は、価値(Value)である。困っている人を助けることは大切なことであるなど、自らの価値観や信念を表出できることを意味する。2つ目は理解 (Understanding) であり、ボランティアをすることで新たな経験や知識、技術、能力を獲得できることを意味する。3つ目は社会 (Social) である。新たな人との出会いや人的ネットワークの拡大、新たなコミュニティへの参加を可能にすることを意味する。4つ目はキャリア (Career) である。これはボランティア活動で自分の持つ知識や能力

を試したり、キャリアを築く時にその経験や能力が有効に働くこと、また新たな職種への興味を広げることを意味する。5つ目は防衛（Protective）である。自分が否定的、不利な状況であっても、ボランティアをする事で負の気持ちを消したり忘れられることを意味する。6つ目は強化（Enhancement）である。自尊心や自己肯定感を高めることを意味する。表1は実際にクラリーが作成したVFIモデルである。

表 1 クラリーによって作成された VFI モデル

| VFI scale and items |                                                                                                  |
|---------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Protective          |                                                                                                  |
|                     | 7. No matter how bad I've been feeling, volunteering helps me to forget about it.                |
|                     | 9. By volunteering I feel less lonely.                                                           |
|                     | 11. Doing volunteer work relieves me of some of the guilt over being more fortunate than others. |
|                     | 20. Volunteering helps me work through by own personal problems.                                 |
|                     | 24. Volunteering is a good escape from my own troubles.                                          |
| Values              |                                                                                                  |
|                     | 3. I am concerned about those less fortunate than myself.                                        |
|                     | 8. I am genuinely concerned about the particular group I am serving.                             |
|                     | 16. I feel compassion toward people in need.                                                     |
|                     | 19. I feel it is important to help others.                                                       |
|                     | 22. I can do something for a cause that is important to me.                                      |
| Career              |                                                                                                  |
|                     | 1. Volunteering can help me to get my foot in the door at a place where I would like to work.    |
|                     | 10. I can make new contacts that might help my business or career.                               |
|                     | 15. Volunteering allows me to explore different career options.                                  |
|                     | 21. Volunteering will help me to succeed in my chosen profession.                                |
|                     | 28. Volunteering experience will look good on my résumé.                                         |
| Social              |                                                                                                  |
|                     | 2. My friends volunteer.                                                                         |
|                     | 4. People I'm close to want me to volunteer.                                                     |
|                     | 6. People I know share an interest in community service.                                         |
|                     | 17. Others with whom I am close place a high value on community service.                         |
|                     | 23. Volunteering is an important activity to the people I know best.                             |
| Understanding       |                                                                                                  |
|                     | 12. I can learn more about the cause for which I am working.                                     |
|                     | 14. Volunteering allows me to gain a new perspective on things.                                  |
|                     | 18. Volunteering lets me learn things through direct, hands on experience.                       |
|                     | 25. I can learn how to deal with a variety of people.                                            |
|                     | 30. I can explore my own strengths.                                                              |
| Enhancement         |                                                                                                  |
|                     | 5. Volunteering makes me feel important.                                                         |
|                     | 13. Volunteering increases my self-esteem.                                                       |
|                     | 26. Volunteering makes me feel needed.                                                           |
|                     | 27. Volunteering makes me feel better about myself.                                              |
|                     | 29. Volunteering is a way to make new friends.                                                   |

（Understanding and Assessing the Motivations of Volunteers: A Functional Approachより）

桜井はクラリーらが用いたVFIモデルの質問項目に加え、その後の先行研究を参考にし、追加で参加動機に関する27の質問項目を作成し、何らかのボランティアグループに属する人を対象に調査を行い、10代～70代以上までの287の回答を得た。その後、因子分析（複数の変数の背後に潜む次元を発見するための統計分析手法）を行い、7つの因子を抽出した。1つ目は「自分探し」動機で、自分に自信が持てないといったネガティブな意識と、自己成長の意識の結びつきを示す。2つ目は「利他心」動機で、利他主義的な動機のことである。3つ目は「理念の実現」で、ボランティア活動を通じて個人的・組織的な理念を実現したいことを示す。4つ目は「自己成長と技術習得・発揮」動機で、知識や技術を身に付けたい、またはそれらを発揮したいことを示す。5つ目は「レクリエーション」動機で、仲間づくりや活動自体を楽しみたいことを示す。6つ目は「社会適応」動機で、人から誘われたり、勧められたことを示す。最後に「テーマや対象への共感」動機で、以前、自分も対象者と同じ境遇だったことを示す。桜井のこの研究では性別や年齢による参加動機の差異も見られ、若年層においては「自己成長と技術習得・発揮」と「レクリエーション(活動を楽しむことを目的としたもの)」が他の年齢層に比べて有意に強く、「自分探し」もやや有意に強かった。一方、高年齢層においては「利他心」、「理念の実現」、「社会適応」が有意に強く、「テーマや対象への共感」もやや有意に強かった[桜井 2002:117]。

松岡、小笠原は、あるスポーツのボランティアを行う NPO 法人に所属する 26 名（平均年齢 34.6 歳、女性 22 名、男性 4 名）にボランティアの参加動機を自由記述式で調査を行った。データの分析では、26 人から得られた 70 の解答から 52 のテーマを見つけ出し、そのテーマを分類して 10 のサブカテゴリー、さらにそれを 5 のカテゴリーに分類した。すると大きく、人との出会いなど「社会的な利益獲得」、「利己的動機」、「組織への貢献の義務感」、「社会への貢献の義務感」、「スポーツへの関心」の 5 つに分類された。その中でも利己的動機の意見が多く、それを一括りにするにはあまりにも様々な要素が含まれてしまうため、クラリーのように幾つかに分類するという案を採用し、利己的動機をさらに 4 つに分類し、結果 8 カテゴリーに分類された。1 つ目は何か役に立つことをしたい、スポーツの普及など社会に対しての貢献を意味する「社会的義務」である。2 つ目は自己実現と自己成長を目的とする「自己陶冶」である。3 つ目は知人の紹介や団体の理念への賛同を意味する「組織的義務」である。4 つ目は仕事に役立つネットワークを目的とした「キャリア」である。5 つ目は新たな出会いや協働の喜びを目的とする「社交」であ

る。6つ目は知識や経験の獲得を目的とする「学習・経験」である。7つ目は単純な興味からくる「個人的興味」である。8つ目はスポーツへの興味からくる「スポーツ」である。

### 3. 学生ボランティア活動の状況

#### (1) 学生のボランティアの参加動機

次に本稿の研究対象である学生のボランティア参加動機についてみていきたい。

日本財団学生ボランティアセンターは2017年に全国の学生1万人を対象にボランティアに関する意識調査を行った<sup>(2)</sup>。2017年にボランティア活動をした学生が、その活動を始めたきっかけに対するアンケート結果によると、知人や家族の紹介などを含む「団体や知人との関係性」が30.4%、「自己実現・自分自身のため」が27.5%、「その団体への共感」が21.1%、「社会貢献の意識」が8.2%、社会的に正しいことをしたい、罪滅ぼしをしたいなどを含む「倫理観・道徳観」が2.9%、その他が9.9%となった。

荒井は、首都圏の4年制大学に通う学生174名にボランティア参加動機における質問66項目を用意し、アンケートを行った[荒井 2017]。その後因子分析を行ったところ、第1因子は自分とは異なる境遇の人と接し、その生活を知りたいからというような体験思考の感情を含む「体験思考因子」であった。第2因子は社会貢献がしたいという感情を含む「社会貢献因子」であった。第3因子は活動内容やその対象者に興味を持った「興味対象志向」であった。第4因子は友人に誘われたなどの他者の同調に向かう「他者同調志向」であった。そして第5因子は学校の授業の一環など社会的枠組みによる外発的理由の「社会従属志向」であった。

谷田は福祉ボランティアの参加動機について32の動機項目から成る質問紙を作成し、関東の7大学のボランティア組織の学生を対象に調査を実施したところ、167人からの回答を得た。その質問動機項目では、「全く重要でない」から、「非常に重要である」までの5段階のスケールを用いた。大学生がボランティア参加動機として重要と評価した順番に各動機項目を並べたところ、社会改善を目指すという社会思考の動機や、人のために役立ちたいという利他的動機よりも、学び視野を拡大し、人間関係を広めるという利己的動機の方が重視されている[谷田 2001:87]ことが明らかになった。また、動機の次元を探るため、因子分解を行ったところ6つに分類された。1つ目に興味ある活動の一環として軽い気持ちで始めたことを暗示する「サークル活動の一環」という因子である。2つ目は「利

他心」である。3つ目は福祉ボランティア活動の大切さを感じていることを意味する「福祉ボランティア活動の大切さを実感」という因子である。4つ目は公平で民主的な社会の理想を実現するために自らの意思で始めたことや社会への恩返しを意味する「民主的社会の理想実現」の因子である。5つ目にクラリーの「防衛」機能とも似ている、淋しく満たされない感情から逃げることを意味する「不充足感」因子である。6つ目は周囲の人の期待によってボランティア活動をはじめたことを意味する「周囲の人々の期待」因子である。

図1は桜井を参考に、以上の先行研究におけるボランティア動機概念を、VFIモデルを軸に整理したものである。ボランティアの種類、対象としている年齢によってVFIモデルでは捉えきれなかった参加動機があるということが明らかである。またボランティアは同時に複数の動機を持ち合わせていることは十分に考えられるが、各参加動機構成要素の重要性は個人によって異なるであろう[松岡・小笠原 2002:282]。しかし日本財団学生ボランティアセンターや桜井、荒井、谷田らの調査から分かったことは、特に学生にとって誰かのため、社会のためといった利他的な動機よりも、ボランティアによって得られる自分の経験や学び、人・もの・経験への新たな出会いがボランティアに参加を決める際、重要であるということである。

図1 先行研究におけるボランティア動機概念

| VFIモデル | 価値    | 理解        | 社会       | キャリア    | 防衛 | 強化       |             |                |       |      |
|--------|-------|-----------|----------|---------|----|----------|-------------|----------------|-------|------|
| 桜井     | 利他心   | 自己統治      | 社会適応     | 技術習得・発揮 |    | レクリエーション | 理念の実現       | テーマや対象への共感     |       |      |
| 谷田     | 利他心   | サークル活動の一環 | 周囲の人々の期待 |         |    |          | 民主的社会の理想の実現 | 福祉ボランティア活動の大切さ |       |      |
| 松岡・小笠原 | 社会的義務 | 自己統治      | 組織的義務    | キャリア    |    | 社交       | 個人的興味       | スポーツ           | 学習・経験 |      |
| 荒井     | 社会貢献  | 社会従属      | 他者同調     |         |    |          | 興味対象        |                |       | 体験思考 |

(桜井を参考に筆者作成)

## (2) 学生のボランティア参加後の変容

さて、自己成長や新たな出会いに大きな期待を抱いてボランティアを行った学生が、参加後にどのようなことを感じ、変容したかをみていきたい。

妹尾は福祉施設内でボランティア経験のある福祉系専門学校生を対象としたアンケートを行い、その経験効果を調査した。すると第1因子にボランティア経験が自己成長や満足につながったという「自己報酬感」が測定された。次に、自らの行動や認識が愛他になったという「愛他的精神の高揚」因子、3番目には新しい出会いなどの「人間関係の広が

り」因子がみられた。この結果、若者がボランティア活動の経験で得ていた成果とは、「活動を通じて自分自身が成長できた」、「対象者や他のボランティアから様々なことを教えられ勉強になった」など、自分自身の成長に関する成果であるという[妹尾 2008:39]。

森下は約1ヶ月間、アメリカでホームステイをしながらボランティア・インターンシップを行った学生16名の意識・行動変容と進路選択のアンケート、インタビュー調査を行った。このインターンシップ・プログラムへの参加動機は異文化体験、英語力向上、自分探しなどが主たるものであった。参加後の意識の変容としては最も多かった回答が「以前よりも異文化に興味を持ったこと」、次に「英語の向上意欲」、3番目に「自文化や歴史への理解を深めたい」というものであった。また、行動変容では旅行以外の目的で異文化体験を目的に海外へ渡ったことや、英語学習に力を入れたこと、身近な国際イベントに参加するようになったことが挙げられる。卒業後の進路選択に与えた影響に関しては半分以上の学生が「ある」を選んだ。日本の子供達にも異文化体験を通して自分を変えてもらいたいと思い中学校教員の道を選んだ学生や、海外で日本語教師になりたいと思った学生、さらに長期的なボランティアに参加するようになった学生もいた。またボランティアにやりがいを感じ、福祉分野に興味を持つようになった学生もいる。

川田らは学生のボランティア経験を自己肯定感の観点から研究し、A大学とB大学、2つの大学から10名ずつボランティア経験のある学生を対象に半構造化インタビュー調査を行った[川田 2016]。A大学の結果からは、1つ目に目標達成による達成感や成長の実感といったことから、「存在の肯定」に関する発言が確認できた。2つ目は、自分は自分という感覚や積極的に自己表現ができるようになる「安定した自己」に関する発言が多かった。また、活動の中で仕事を任されること、他者から頼りにされること、活動する仲間との信頼関係を構築することで自分に「自信」を持つようになったという意見も多く聞かれた。4つ目は、自分を受け入れてくれる仲間がいることで自分の居場所を感じるようになったり、様々な人たちとの出会いによる多様な価値観への気づきなどを通して「受容」に関する発言が多く聞こえた。地域のPRイベントや街の活性化に向けてのお祭りへの参画を主としたB大学における学生ボランティアも同じく、1つ目には「存在の肯定」に関する声が聞こえた。その中でも主に2つの要素が挙げられ、1つ目は仲間の存在であり、強調のプロセスの中でお互いに認め合うようになったという。2つ目は外部の存在である。外部の人々から褒められたり求められたり感謝されて利という経験が学生の存在肯定感を高めている。2つ目はやはり「安定した自己」であり、1つ目の要素としては役割の付与

が挙げられた。2つ目は責任感であり、後輩や先輩に対する責任感が大きく関わっていた。三つ目は「自信」であり、自信を生み出す要素としては切磋琢磨しあえる仲間の存在や積極性や行動力の向上、成長体験が挙げられる。「受容」に関しては、ボランティアを行う環境ではコミュニケーションを大切にしている場合が多く、その環境の中で自己受容を高めていることがわかった。またボランティア活動そのものがコミュニケーションのトレーニングの場になっている事も関係していた。

妹尾、森下、川田らはそれぞれ異なる分野のボランティアを経験した学生を対象にボランティア経験からの自分の変化について研究を行っているが、どの研究でも共通しているキーワードは「自己成長」「自信」などといった自分を肯定するような意見や仲間、新たな人との出会いなどの人とのつながりが強くなったという意見である。ボランティアは何かの課題解決に向けて自ら手を差し伸べて活動するものであるものの、学生らはその活動を自分の学びや経験のための一つのツールにしている。しかしこれらの先行研究においては、以上のような「自己成長」、「自信」、「新たな人との出会い」が彼らのその後の行動とどのようにつながりがあるかまでは言及されていない。

次章からは、学生国際協力団体に所属し、実際に途上国でボランティア活動を行った学生らがどのような動機でそれに参加し、何に影響を受け、自身の考えがどのように変わり、それを踏まえてどのような進路選択を行ったのかを明らかにしていきたい。

## 第3章 進路選択への影響の分類

### 1. インタビュー対象団体と対象者の概要

筆者は2019年10月から12月にかけて、学生団体やサークルの一環で、海外で国際協力ボランティア活動を行ったことがある、且つ卒業後の進路が決まっている学生にインタビュー調査を行った。表1はインタビュー対象者リストである。なお、個人情報保護の観点から、インタビュー対象者の名前はアルファベットで表すこととする。

インタビューの対象団体は筑波大学、国際教養大学の学生団体、NPO団体の6団体で、インタビュー対象者は計15名であった。今回、インタビュー内容を分かりやすくするため、15名が所属する団体の概要を以下に簡単に述べる。

1つ目は日本マラウイ学生団体である（表中①）。アフリカのマラウイに焦点を当て、「日本とマラウイの架け橋となる」を理念に、現地へは年に1回、2~3週間ほど滞在し、運動会の開催や、現地の若者との現地課題や自らの夢に対するディスカッション、学校訪問など多岐に渡る活動を展開する。日本国内ではその経験をもとに中学、高校などで講演会を開催や学会への参加を行い、マラウイの情報や自身の学びを発信している。

2つ目はインドワークキャンプ団体 **namaste!**つくば支部である（表中②）。NPO法人わびねすのワークキャンプ事業部のつくば支部として、インドのハンセン病コロニーにてワークキャンプ活動を行う学生団体である。社会から受けたハンセン病コロニーの人々が抱える問題を解決するために、年に2回の2週間ほどの泊まり込みを行う。現地で村人とともに、家屋の修繕、井戸の整備などのインフラ整備、ニーズ調査のインタビューを行う。また国内では支部単位での定例会や報告会などを行う。

3つ目の団体は **WorldFut Tsukuba** である（表中③）。「サッカーを通して世界の人々を笑顔にすること」を軸に国内、カンボジアで活動を展開する学生団体である。日本ではチャリティフットサル大会を企画運営し、その収益をカンボジアにおける情操教育のサポートに当てている。また年に2度、2週間ほどカンボジアに滞在し、ホームステイをしながら小学校にグラウンドの建設、サッカー器具の寄付、サッカー大会などのイベントの開催などを行う。

4つ目の団体は **meSanga** である（表中④）。ネパールのゴミ問題に焦点を当て、若い世代の意識改革を目的に、年に1~2回、2~3週間ほどネパールでホームステイを行いなが

ら、現地の小学校でゴミの分別方法や環境に関する教育支援、大学生とゴミ問題についてのディスカッションを行っている。国内ではネパールの雑貨をチャリティ販売し、その売り上げを現地の活動費に充てている。

5つ目の団体はLUZである（表中⑤）。国際NGO団体Habitat for Humanityの筑波大学支部として、主に途上国で住宅建設支援などを行う学生団体である。1年に2回、2週間程の期間に3~4大学の支部のメンバーと一緒に途上国の田舎に滞在し、貧困や災害によって家を持つことができない人々へ建築ボランティアを行う。国内ではその活動資金のための募金活動を行なっている。

6つ目の団体はNPO法人ハロハロである（表中⑥）。社会人と学生によって構成され、拠点は日本に置いている。フィリピンの貧困地域に焦点を当て、生計支援、教育事業、啓発事業の3つを柱として活動を展開する団体である。生計支援ではコミュニティの女性の副収入を得る機会の支援などを行い、教育事業では幼稚園運営支援や高等教育進学支援を行い、啓発事業ではスタディツアーの開催や日本語教室を行っている。

表 2 インタビュー対象者の概要

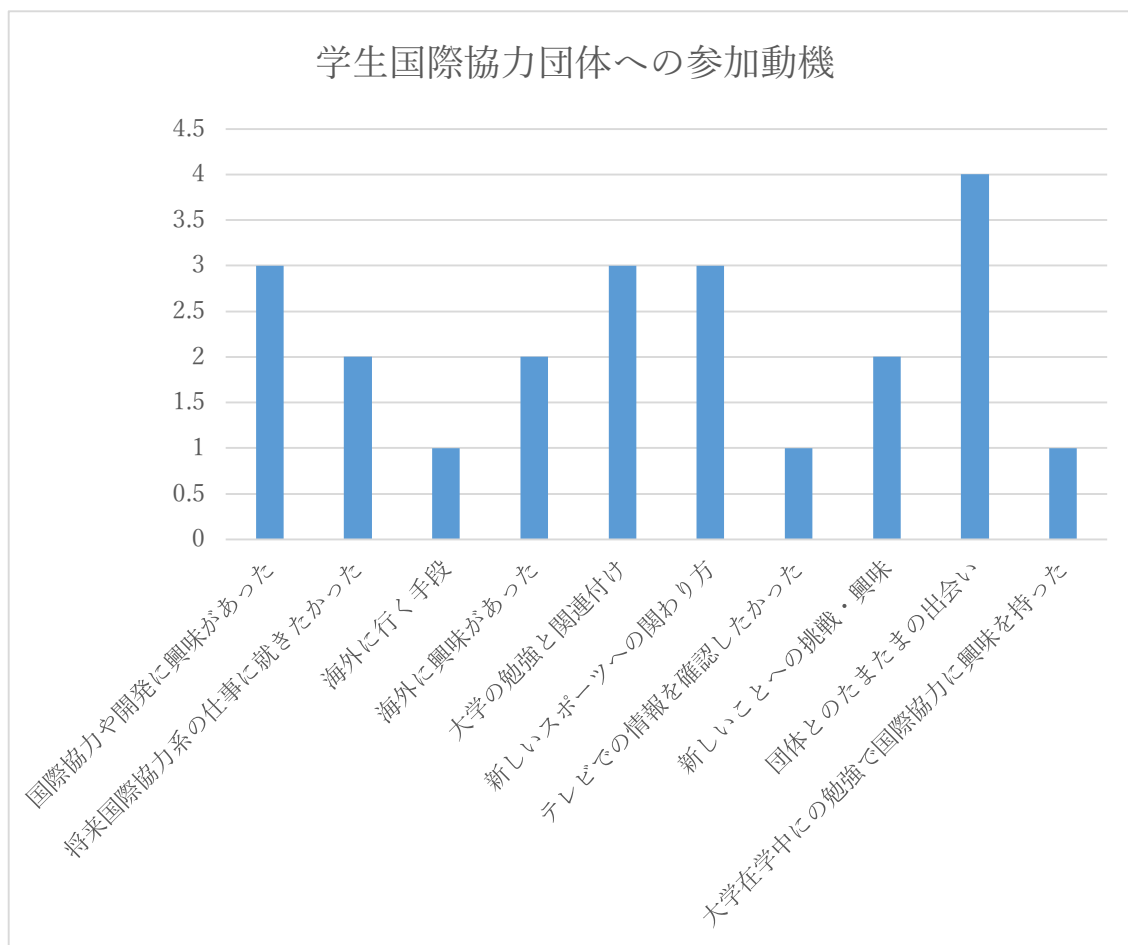
| 番号 | 性別 | 学年     | 学科   | ゼミ     | 学生<br>団体 | 国    | 渡航回数 | 進路  | 進路先・研究内容        |
|----|----|--------|------|--------|----------|------|------|-----|-----------------|
| A  | 女  | 4 年    | 国際総合 | 言語人類学  | ①        | マラウイ | 2    | 就職  | WEB サービス開発の企画   |
| B  | 男  | 5 年    | 国際総合 | 教育     | ①        | マラウイ | 2    | 大学院 | インクルーシブ教育と教育開発  |
| C  | 女  | 4 年    | 国際総合 | 情報     | ①        | マラウイ | 1    | 就職  | WEB サービスエンジニア   |
| D  | 女  | 4 年    | 国際総合 | 教育     | ②        | インド  | 3    | 就職  | 木材系商社営業         |
| E  | 男  | 4 年    | 国際総合 | 文化人類学  | ①        | マラウイ | 3    | 大学院 | 国際公共政策          |
| F  | 女  | 修士 1 年 | 生命環境 | 環境科学   | ①        | マラウイ | 1    | 就職  | 開発コンサルまたは建設コンサル |
| G  | 男  | 4 年    | 社会   | 法学     | ②        | インド  | 4    | 就職  | 経営コンサル          |
| H  | 女  | 4 年    | 国際総合 | メディア政治 | ②        | インド  | 4    | 就職  | 小売店(書店)営業       |

|   |   |        |           |        |   |             |   |     |               |
|---|---|--------|-----------|--------|---|-------------|---|-----|---------------|
|   |   |        |           |        |   |             |   |     |               |
| I | 男 | 4 年    | 国際総合      | 文化人類学  | ③ | カンボジア       | 3 | 就職  | メーカー営業        |
| J | 女 | 4 年    | 社会工学      | 都市計画   | ③ | カンボジア       | 3 | 大学院 | サービス工学        |
| K | 男 | 修士 2 年 | 構造エネルギー工学 | 宇宙工学   | ③ | カンボジア       | 2 | 就職  | WEB サービスエンジニア |
| L | 女 | 4 年    | 国際教養      | フランス政治 | ④ | ネパール        | 1 | 就職  | 総合商社営業        |
| M | 男 | 4 年    | 社会工学      | データ解析  | ⑤ | ミャンマー・フィリピン | 2 | 大学院 | データ解析         |
| N | 女 | 4 年    | 社会工学      | 都市計画   | ⑤ | カンボジア・ミャンマー | 2 | 就職  | 鉄道会社技術職       |
| O | 女 | 4 年    | 人間文化      | 開発人類学  | ⑥ | フィリピン       | 1 | 就職  | IT システムエンジニア  |

## 2. 国際協力ボランティアへの参加動機

国際協力ボランティアは、どこか遠いイメージが強く、活動の内容が見えにくいという点から興味を持つ者、持たない者が分かれるものである。本節ではそんな国際協力ボランティアに参加しようと思った動機を整理する。

図 2 インタビュー対象者のボランティア参加動機



(筆者の調査に基づく)

インタビューの結果、1人の学生が複数の動機を持って国際協力団体への参加を決意していることがわかった。図2は複数の回答を含めたインタビュー対象者の参加動機である。国際協力や途上国開発に興味があったり、将来国際協力の分野で働きたいということによってボランティアに参加した学生は、貧しい人に貢献したい、という利他的な目的は持っておらず、まずは自分の目で現場のリアルを見たい、と学生国際協力団体への参加を海外に行くための手段とみていた。その例としてC、D、Hはこう述べている。

C：「入った理由としては現地に行って自分の目で見て活動ができるからってこと。」

D：「高校の時にオーストラリアとかフィリピンとかに研修みたいな感じで行って、また海外に行きたいっていうことで学生団体っていうのを見てた。」

H：「海外とかインドに行く一手段として入った。アメリカとかにしか行ったことがなかったから、環境が違う海外に行ってみたいって思いはもともとあって。」

学生団体は海外へ行く機会を提供する場として一番身近に存在しているのかもしれない。なぜなら学生団体で海外へボランティアに行く場合、留学とは違い、期間は短く長期休暇を利用としていくことが多いため学生にとっては手軽に行くことができる。また一人で行くよりも、自分が組織の中で活動を行いながら自分自身の興味を確かめに行くことができるため、途上国という、治安面や衛生面、精神面でも不安があるような地域でも学生団体を通すことで学生は行きやすくなるのであろう。

そして多くがもともと途上国、そして国際協力や開発に関心を示していた、もしくは海外に関心があったと述べたこととは逆に、それまで関わったことがない分野であるからこそ、大学で新たに挑戦してみようと述べている者がいた。Jはその一人で、高校までテニス部に所属し、途上国支援には全く興味がなかった。しかし自らが国際協力支援に携わろうと思った動機を次のように語っている。

J：「きっかけは、サッカーとかあんまり興味ないとかあんまりルールとか知らなくて、あとは途上国に支援するっていうのも、高校の時から想像もつかなかったんで、大学生でやるなら今まで考えてもみなかったようなことをやろうと思って。結構みんな活動してるっていうかちゃんとした団体っぽかったんで入りました。」

これは高校まで全力を注いだものから一旦離れ、自分のやりたいこと、もしくは興味がなかったこと、新しいことでも自由に挑戦できるという大学生の「自由さ」に起因した参加動機である。なんらかの理由で途上国や国際協力というものに触れない限り、携わることが少ない分野だからこそ、「新しいこと」として認識され、参加動機の一つになってい

るのだ。また、インタビューでもともと国際協力や開発には興味を抱いていなかった学生から多く聞かれた参加動機が、「たまたま団体を知って、その内容に興味を持ったから」というものであった。彼らの知ったきっかけは日本財団学生ボランティアセンターが行った、ボランティアの参加動機に関する調査において、団体や知人からの紹介が全体の約33%になっていることと通ずるものであり、多くの大学生がボランティア活動を行うにあたっては身近な人の情報が1番のきっかけになるのであろう。

学生の進路選択の結果の分類としては以下の3つがあげられる。なお、ここで分類した国際協力や途上国開発の仕事とは、第1章で述べたように、国際社会の平和と安定、発展のために人、もの、金を使って途上国の人がより良いと思う状態にするために支援をすることを主な目的とする仕事を意味する。

- ① 今後も国際協力や途上国開発を仕事にする(予定)。
- ② 今後、国際協力や途上国開発を仕事にしない、ただし進路選択の1つの選択肢となった。  
(その道で働くか迷った。)
- ③ 今後、国際協力や途上国開発を仕事にせず、進路選択の際も1つの選択肢とはならなかった。

### 3. 進路選択パターンの3つの分類

#### (1) 今後も国際協力や途上国開発を仕事にする(予定の)ケース(B・F)

BとFはいずれも現地へ行って、具体的に自分が現地にどの側面から関わっていくべきか疑問を持ち、見つけ、それについて理解を深めようと様々なコミュニティに参加しているところに共通点がある。Bは高校の世界史の授業をきっかけに国際協力に興味を持ち、自分が現地のために何ができるかを探すために現地へ渡った。直接的なエピソードがあったわけではないが、渡航中の経験、そして帰国後もどのように自分は貢献できるのかを様々な人との話やイベントへの参加を通して考え抜いた結果、教育がBのキーワードとなった。

筆者：「渡航全体含めて教育が大事って言ってたけどその間に何があったんですか？」

B：「色々なところに行って会った人たちのことを想像して、自分は何ができるんだろうって考えた。自分がフォーカスできるところにはやっぱり限りがあるんだよね。どこにフォーカスしようって考えてて、それは政治なのか経済なのかいろんな学問分野があるじゃん。インフラとかも。その時思ったのは、例えば自分が医療の現場に従事して薬を作る仕事をしてても途上国のインフラが悪ければ国道から逸れたところには薬は届かないよねって思って。あちらが立てばこちらが立たずの状況を想像してしまって、それができるだけ成り立たないようにしたくて。それを教育だった。それを頭の中でマラウイに行った時も行った後も考えてた。自分ができることはたかがしれてるから、政治経済いろいろに携われる人を自分が育てる、多分教育をそのボトムに位置付けてたんだと思う。根本から解決できるかをその時の自分は感覚として持ってたから教育に興味を持った。」

Bは1年後にもう一度マラウイに渡り、教育の重要性を再確認した。それから日本で教育系のインターンや学生教師としての経験を経て、ケニアで教育系のNGOでインターンを始めた。ケニアでのインターンをする中で、障害児との出会いがきっかけで途上国の障害児教育について卒業論文を書くことになり、それからインクルーシブ教育という分野に興味を持ち、大学院ではその分野を専門的に学ぶという。また教育関係の就職をせずに大学院を選んだ理由、そして今後のキャリアについてBはこう語った。

B：「自分は今後教育開発の分野に行きたいなっていうのがあるんだけど、具体的にどう働くかを考えた時に、開発の業界ってジェネラリストとスペシャリストの2つのコースがあって。俺は研究職のスペシャリストの方に行きたかったから、スペシャリストの仕事をするには前提条件として修士卒の資格が必要だから効率的だった。新卒で民間企業に行く理由もなかったし。あとは単純に研究することに対して適性があるなって思ったから進学しようと思っている。だから最終的には開発系のスペシャリストとして働きたい。」

Bは国際協力の中でも教育を専門に途上国に将来関わりたいということ、そして自分の適性が研究に向いていることを踏まえて大学院に行くことを決意した。

また、Fは高校生の時にケニアに行き、大学ではケニアとの違いを見たいという理由で、特にアフリカのマラウイに焦点を当てている団体に所属し現地へ渡った。ケニアでは実体験から水の重要性を実感し、マラウイではそれを再確認するとともに、水に対する考え方が変わったという。

F：「最初（ケニアでは）は水をきれいにしたいっていう考えだったんだけど、水をきれいにする前に水がなきゃダメだと思って。マラウイに行った後にそういうふうに思い始めたから、きっかけにはなって。本当はろ過とか浄水の設備とかを向こうで作りたいなって考えてたんだけど、水をどうやって管理するかとか、今水資源どれくらいあって、どのくらい使ったらなくならないけど、これ以上使ったらなくなるからセーブしようねとか、そういうことを学びたいって思った。そういうことを向こうの人に伝えていきたいなって思い始めた。」

それからFは地下水について専門的に学ぶようになり、さらに水についての知識を深めるために Water Aid が主催する講義への参加や、授業形式で水の重要性を市民に発信している団体に所属した。そして大学院後の進路選択についてこう語る。

F：「最初は JICA とか上の方を見て、JICA の人の話を聞いてるとなかなか現地に入り込むことはなく日本で企画するタイプなんだなって思って。私はその時は向こうに行きたいし向こうで働きたいなって。NGO とかも見たんだけど、NGO とかは逆に狭い地域しか見ないから自分の視野が狭まるなって思って。私はマラウイに特化したいというより全体的に見たいから。ちょうどその間にあるのが開発コンサルタント。その方が私にあってるし向こうに行けるしこっちでも仕事できるしっていうのでそれかなって思って。希望は農業か水。」

Fはアフリカが好きな気持ちと、自分の関心があることを仕事にしたいということで、実際に現地での活動が多い開発コンサルタントに進む予定をしている。

BとFにとっての国際協力ボランティアの経験は、彼らが今後どんな側面から現地に関わっていくかについて考えるきっかけを与える役割となり、そこで見つけた興味は他のコ

コミュニティでの参加を通して彼らの中で深化され、それを自分の仕事にしていくという一連の流れを構成させる1つの要因となっていると。

**(2) 今後、国際協力や途上国開発を仕事にしない、ただし進路選択の1つの選択肢となったケース(G・H・I・J・O)**

このケースに当てはまる学生の特徴的な点としては、そもそも国際協力や途上国開発を仕事にしたかったわけではなく、海外に興味があったから参加したという理由が多い点である。では、彼らが国際協力や途上国に特別な期待感を抱いていたわけではなかったにも関わらず、それを続けようと思ったモチベーションはどこにあったのだろうか。また結果的にその道を選ばなかった理由を整理したい。

Iは高校まで続けたスポーツとしてのサッカーではなく、社会貢献のツールとしてのサッカーという、新しいサッカーの関わり方に惹かれたことが大きな理由でボランティアに参加した。Iは団体の代表を務め、現地のニーズと自分たちがやりたいことや現地のためにできることを3年間模索する中で、様々な人との話から大学院に行って国際協力についての知識を深めること、そして途上国のNPOで働くことに興味を持った。Iが国際協力に関り続けようと思った理由をこう語る。

I：「結構いろんなNPO行ったのね。実際にプロとしてやってる人たちに活動のアドバイスとかもらいに。NPOとかすごいいいなって思ったのと同時に。（省略）開発について詳しい先生とかとも話したりして、土着でその地域を盛り上げていきたいみたいなのはWorld Fut入ってから思ってたから。・・・アフリカの国のNPO団体(ナイロビの首都のスラム外の問題をサッカーで解決する団体)があって。そういうのとかを見て、こんなうまくやってるところもあるんや、って思って。自分も土着で0から何かやってみたいって思いがあるかも。それが楽しいね。」

Iにとって、今後も国際協力に携わろうと思ったモチベーションは、まず第一に、学生ボランティアとしてカンボジアというフィールドに入り、現地の人と協力する活動そのものに対して感じていた「楽しさ」だった。その「楽しさ」があったからこそ、現地のためにもっとできることを探し、成功している団体に憧れを持つことになったのだ。そして3

年生の冬まで就職か、大学院かを迷っていた L であったが最終的に NPO への就職はせずに、メーカーの営業に進路を決めた。その理由をこう語った。

筆者：「NPO とか院に行きたいと思ったみたいけどどういう風に思考が変わった？」

I：「大学院に行くのは今じゃなくてもいいって思ったのがあって。普通の社会人は自分には向いてないって最初思ってたけどやってみたら意外と向いてる仕事もあるかもしれないって思ったし、そういうのが自分の人生としてはいいのかも。一応やってみないとわからんから、やってみようって思ったのが一つ。あとは日本って、新卒の価値がめちゃめちゃ高いからやってみようって思った。国際協力の道がほんまにやりたいことやったら戻ってこれるし。World Fut 入ってから、開発・国際協力に興味持ってやってみたいって思ったけど、それが今なのかなって思ったり。ほんまにやりたいことなのかなって思うと、自分にそこまでのエネルギーがあるか微妙になった。World Fut 終わった時に、現地のニーズと自分たちのやりたいこととかでできることのすり合わせが結局できなくてもやもやして。でもその後に何にもアクション起こすことができなかったのね。」

進路選択で自分の進路を考えた時に、不完全燃焼で活動が終わったにもかかわらず、その後自分の行動に変化がなかったことを自分なりに解釈し、国際協力の道を考え直した。その後、一般企業での就職活動を行い、もともと海外で働きたいという思いがあったため、海外転勤がある会社を選んだ。

H も一度はインドの NPO で働くことを考えていた。きっかけは H が 3 年生になる時にその NPO から 1 年間のインターンの誘いを受けていたことにある。そのインターンは H が 1 回目のインターン生ということもあり、それに参加すればその道に就職するということを覚悟したという。そのインターンに参加するか悩んだ結果、H はもともと興味のあったメディア系を中心に就職活動を行うことを決めた。その理由をこう語る。

H：「そのインターン行く意味ってなんなんだろうって思ったら人生の岐路だって思ってた。私国際協力とかボランティアとかに一生を捧げられるかって考えたらそうじゃないかもって思ったんだよね。過去参加してモチベーションはどこにあったかという、みんなでキャンプに行くことが楽しいとか、現地に行ってその人たちに会う

のが楽しいみたいな人としての繋がりが楽しいなって思ってた。正直大きな問題を解決するっていうのが第一の理由じゃなかった。この人たちと一緒にいるのが楽しいから続けてきた、みたいなのが大きくなって思ってた。実際に国際協力の道に進みますってなったら社会問題を解決するとか大きな志がないとしんどくなっていくだけだなって思ったから。」

Hは自分の感じていた「楽しさ」が途上国の支援や開発を目的とする職業とは合わないことに気づき、その道に進むことをやめた。学生団体の場合、理念や活動の目的はその国の人を笑顔にする活動や、そのための支援活動であっても、学生団体の活動は自分の生活を支える仕事ではないため、組織の理念や目標が、個々人の目標と重なっていることは少ない。Hのように1度は迷っても、国際協力を仕事にすると本気で考えた時、続けられないと感じるのは少なくないのだろう。

JやOは現時点での進路は国際協力とは別の道であるけれど、将来的にまたその道に戻りたいと語った。しかし彼らは現地の人に対して、「今の生活に苦しんでいるわけではなさそう」という印象を抱いていた。それにも関わらず、現地の人を支援する活動をしたいと思った理由をこう語る。

筆者：「その姿を見て、自分たちの活動の意味ってなんなんだろうって思いました？」

J：「ん～、そこすごい難しいですね。そのグラウンドを立てたことで学校に来るようになってちゃんと勉強できるようになったっていうのは結構村の人たちが気付いてないことだったり、気づいてないけど必要なことだったと思うんで、外から来るものの意味としては、その現地の人に分かってないけど、必要なことをちゃんと見つけて自分たちのできることの範囲で、やるっていうのが自分たちの意味なのかなって思いました。」

Jはグラウンドを立てた後、小学校の先生からより多くの生徒が学校に来るようになったというのを聞いてた。この事実を村の人は知らないものの、そのような結果を出すことができたという経験などから、そう感じながらも支援を続ける意味を自分なりに解釈をしていた。そして彼らはその後も現地で活動する中で「現地の人たちと関わるのが好き」という気持ちと「これからも支援をしていきたい」という気持ちが出てきたという。

J：「東南アジアの全体の人たち、そういう途上国の人たちのために何かしてあげたいなって。自分の経験も活かせるし、自分の学問で勉強してきたことを使ってできることだと思ったんで。」

Jはそんな思いを感じ、学生団体のボランティアを終えてから途上国開発を行うインターンに参加し、そのままその道に進むことも考えた。しかし、自身の研究が理由で一度国際協力から離れ、もう一度自分の進路と向き合った。Jは将来的にまた国際協力の舞台で働きたいと思ったら戻ってきたい、と語ったが、結果的に今まで携わってきた分野とは別の新たな学問を学びたい、という意味を優先し大学院に進学することを決意した。また、Oは国際協力という分野を大学で専攻し、Oも自分で途上国の現状を見ていた立場に立って、やっぱり苦しんでいる人たちはいるということに気づき、支援を続けたい、という気持ちが出てきたという。

O：「気持ち的に一応専門として国際協力と途上国の問題とか文化とかそういう世界を学んできて、就職ってなった時に、そんな世界をそんな悲惨というかそんな世界を知っておきながら全く違う仕事をしないことって私にはできないなって思っ。やっぱりそういう人たちの支援に関わり続けたいなっていう。」

Oは将来的に国際協力に専門性を持って携わりたいという思いから、まずは就職活動を行って一般の企業でITエンジニアとして働くことを選択し、その後そこで得たITの知識を持って、国際協力の舞台に戻りたいと語った。

### **(3) 今後、国際協力や途上国開発を仕事にせず、進路選択の際も選択肢とはならなかったケース(A・C・D・E・K・L・M・N)**

途上国でボランティアとして活動し、1人1人が自分の学びや経験を得たにも関わらず、その道が続けようと思わなかった何人かの学生の共通理由として、現地で感じた失望感がある。Cはもともと正義感が強く、高校生の頃から人助けをしたいと思っていた。現在の大学や学科を選択したのも、将来的に直接人助けができるイメージがある途上国開発

の仕事に就くための勉強をするためだった。そんな志を持って、途上国の実情を自身の目で確かめたいと思ったCであるが、現地での失望感をこう語る。

C：「開発をやりたいから現地を見てみたいってことで行ったけど、その文脈でいうと絶望した。実際貧しいし、日本と比べたら明らかに違うんだけど、貧しさっていうのは見えた。実際のところはいわゆる開発が難しいと言われる理由が分かったというか。現地の人がよくしたいと思って動いているならまだしも、実際彼らが援助ありきでいけるというスタンスが垣間見れるし、日本人って言うと金くれって言われるし。これは良くなれないわって思っちゃった。でも私はそこで育ったわけではないから、そうなる理由が理解できないけど、実際私がそこで育ってそういう生活をしていたら、私も外国人からお金をもらおうっていう気持ちになるんだろうし。だからいい意味で行った意味はあった。ある種諦めた部分もあるし、納得した部分もあるし、その現状にびっくりしてる自分にもびっくりしたというか。」

筆者：「そういう風に思っただけで帰ってきて、進路についてどう考えが変わった？」

C：「そもそも私が開発したいっていうのは、自分がやりたいって思って大学で何かを学ぶ以前の夢みたいところで動いてきた部分があったから、現実を見た時に自分がやりたいと思ってた仕事の意義みたいなものがわからなくなって。開発は進んでるんだろうし、前よりは良くなってると思うんだけど、貧困とか格差がなくなる未来が見えなくて。自分が目指してた仕事の存在意義がわからなくなったし、自分がやりたいとも思えなくなって。」

Cの失望感は、Cが思っていたよりも開発が進んでいなかったことや、援助ありきで生活している人々の姿に対してであった。その結果、国際協力の限界を感じ、Cの前から将来の選択肢としてその道はなくなった。そしてちょうど自分の専攻を決める時、彼女はたまたま授業で面白いと感じていた情報系のゼミに進んだ。その後もプログラミングなどの面白さに惹かれ、最終的にも文系ながらエンジニアという職種を選んだのである。

また高校生の時に国際協力を専門にする社会人の話を聞き、貧困の人を救うことに憧れを抱いていたDは、現地で村人と一緒に作業を進め、仲を深めることで、次の課題やニーズも聞き出せるだろうという期待を抱いていたという。しかし、現地へ行って活動をして

みるとその期待は裏切られ、国際協力は援助側のエゴなのではないかを感じるようになったという。

筆者：「初めてインドに行ってどうだった？」

D：「すごい現実を知らされたって思ったというか。欲しい欲しいって村人はいろんなことを要求してくるんだけど、じゃあ実際井戸を立てますっていうと、全然協力的になってくれなくて。多分それは日本人とインドの人の働き方に対する考えとか時間に対する考えとかもあるんだと思うけど、その井戸を掘ることに限っては、特に日本人の私たちはこの日に話し合いをして、この日に重機が来て井戸を掘ってみたいなスケジュールをきっちり立てて。でもそのスケジュールを向こうがあまり把握してなかった。かと思えば、私たちの立てた予定お構い無しに大きい重機が来てて勝手にやってたりとか。もうそうなってくるとまあ予定なんてものではなくて、こっちが行って手伝いをするって形になるから。（省略）でも結局建てたのはワピネスのお金だから、井戸の周りにちゃんと NPO 法人ワピネスっていうのを書いて、あたかも私たちがやりましたって感じにして。だからそういうところで、すごいショックを受けたのと、村人にインタビューをしようとしても出てくる答えは、井戸建てたのにまた作って欲しいとか、結構、村人にわがままを言われているような気がして、もしかしたらこういう活動って私たちのエゴなんじゃないかって思ってしまったっていうのはある。」

D は村人が自分の期待とは正反対の行動を取ったこと、そしてあたかも自分達と一緒に建てたかのように看板を立ててていたこと、インタビューの回答が期待していたものとは異なったことに対して失望感を抱いていた。D はその経験から自分たちの活動は本当に現地の人にとって必要なかを疑問に思い、それを確かめたい気持ちと 1 回目に入った時に組織の中で自分の役割を全うできなかったことを理由にもう一度現地へ渡った。しかし 2 回目の活動は体調不良などのアクシデントで思ったように活動ができず、3 回目の渡航を決める。しかしそこでも予定通りに動いてくれない現地の人に対して諦めの気持ちが芽生えた同時に、自らが国際協力の道には向いていないということに気がついたという。

D：「国際ボランティアをすることが自分の目的とすべきなのかって考えたんだけど、海外の国際協力で相手にする人って何かに対してルーズな人とかそういう人が多いと思うの。現地の人って。ルーズな人とか約束守らない人とか。そういう人を相手にするっていうのはこれから自分が仕事を選ぶ上でもそうだし、じゃあ自分が今後国際協力に行くかとかそういうのを考えた時にも向いてないなって思ってしまったのね。」

その後 D は漠然と大企業や福利厚生が整っている会社を中心に見て、結果的に木材系の商社へ就職する予定である。

L は将来海外で働きたいと思っていたが、たまたま知り合いからネパールで活動を行う団体の話を聞いて参加を決意した。L 自身、海外で働くとは JICA や国連のような機関で働くことを意味するのかということには疑問を持っており、ボランティアや国際協力が自分に合っているのかを確かめることを目的の一つとしてネパールへ渡った。L はネパールへ行く前、ネパール人のイメージとして、適当で明るくて優しそうというポジティブなイメージを抱いていた。しかし実際に L が感じたネパール人への印象は真逆なものであった。

L：「私はどちらかというとなパール人はすごく怖いかも、と思いましたね。優しい人も多いんですけどもちろん。私の顔を見て近づいてくる人たちってお金を狙ってるか、なんか物を売ってくるかっていう感じなんですよ。だから、外国人に排他的というか、外国人からお金をもらおうとしてるっていう印象があって。」

L は自分がなぜネパール人に対してそう感じるのかを疑問に思い、たまたまそれにつながる話が聞けたという。そして、その話をきっかけに L のボランティアや国際協力に対する考えが変化している。

L：「たまたま道であった警察官の人が話してくれたんですけど。ネパール人は変わってしまった、昔はこんなじゃなかったみたい。もっとみんな気さくで外国から人が来たらどっから来たのとか、これ食べなとか、これもお土産であげるよ、とかそういうもっと優しい関係だったのに、JICA とかいろんな国がボランティアとか

いっぱい支援してお金をくれるようになったら、お金をどうやったらもらえるのかって考えるようになったっていう話をしている。なんかそれを聞いてちょっと残念だったというか。すごい根本的な話になっちゃうんですけど、ボランティアって意味あるのかなって思っちゃったそれで。」

筆者：「そこから結構 JICA とか国連やりたいのかっていう気持ちに揺らぎが出たって感じですか？」

L：「そうですね。私はもう決定的にもうボランティアじゃなくてビジネスで社会を変えたいっていう風に思うようになりましたね。」

L はボランティアをしたが故に国民の温かさが消えたということを聞いて、ボランティアが本当に現地のためになっているのだろうかという失望感から JICA や国連といったいわゆるボランティア、国際協力とイメージされるものへの興味をなくした。そしてもう一つ、JICA のやっていることに疑問を持つ経験があった。

L：「JICA が作った信号機があるんですよ。それが動いてなかったんですよ。これってどうして電気が付いてないのって話を聞いたらまず、ネパール人は赤で止まる習慣がないっていうか。だからまずこれ何？みたいになっちゃったっていうのと、あとネパールって停電がすごい多いんですよ。だから停電多いし電気食うから消しましたみたいな。それを見た時に、もう無駄が多すぎるから私だったら発電所作って電気を起こさせて、そしたら雇用も増えるし、そこで働く人のレベルも上げれるから、交通ルールについての教育もできるし。それで電気も作れるようになって、それから信号作るってなった方が絶対私は win-win だろうなって思うんですよ。でも JICA はそれができないんですよ、結局政府のお金なので。だからそれをやるんだったらやっぱりでっかい企業とかもうお金を大きく動かせるところじゃないとダメだよなっていう風に思って。ボランティアとかの限界、多分 JICA の人とかめっちゃくちゃ頭いいし、国連の人とかもめっちゃめっちゃ考えてやってるんだろうけど、結局使えるお金とか体裁というものに限りがあるから結局の社会貢献にはならないのかなって考えたりしましたね。」

JICA が作った信号機とネパールの文化がマッチしていなかったことを知り、JICA への不信感がさらに募ったと同時に、JICA と比べた時の企業の力の大きさを感じた L は、ボランティアの限界というものを再確認した。またネパールで体調不良になった L は、ネパールの病院の設備が全く整っていなかったこと、L に関係のある村の人々が小さな病気でも命を落としていることに衝撃を受け、その後途上国で事業を展開するコンサルタント会社や、病院や発電所など L が課題と感じたことを、大きなお金を使ってビジネスで解決していく総合商社を中心に就職活動を行った。

M は建築やデベロッパーをやりたいという理由で、大学入学からゼミを決めるまで都市計画を学んでいた。途上国の建築に力を入れる国際協力ボランティアで初めて途上国に関わり、現地の人々の生活に触れると途上国の都市開発に興味が変わってきたという。途上国の都市開発をするにあたって、満遍なく国を発展させたいと思っていた M であったが、現実を知るうちにその道を諦めた。

M：「やっぱり国の考えって硬いので、どうしても発展途上国では揺るがないんですよ、中央に集中したい（都市部がどんどん開発されていく）っていうのが。集めないとやっぱり国同士の競争で勝てなかったり、集めることで工業も効率化できるし。国としても一番集中している部分は、代表になるわけだから顔じゃないですけど、見栄えもそうだし。そういう都会になった中で、いろんな文化とかも新しいものできたりするからやっぱそこは外せない状況なのかなって思って。そうなってしまふのはしょうがないと思うんですけど、もう少し頭柔らかくできないのかなって思っちゃって。その政府の考えが前提としてあるから、自分は何もできないなって思うというか、結局変わんないしなって。自分はいま国全体を満遍なく開発できるんじゃないの？って思っちゃうんで。そこで頑張れる元気がないから、代わりに開発を仕事にする人が頑張ってくださいって感じですね。」

M は政府の都市開発のやり方では、自分が思い描いていた都市開発が不可能に近いことに失望感を感じていた。途上国での都市開発の進路をやめた後、自身の研究として授業で面白い、そして今後社会に大きなインパクトを与えると感じたデータ解析を選択し、就職してもそれに関する仕事を続けたいという。

彼らの例からわかったことは、国際協力ボランティアというより、学生がより簡単に途上国とのつながりを持つことを提供する学生団体は、彼らに良くも悪くも途上国、あるいは国際協力・開発の現実を彼らに突きつけ、それによって感じた失望感は、他の分野に視野を広げるきっかけづくりをする機能があるということである。

## 第4章 学生ボランティアと進路・キャリアとの関係性

### 1. ボランティア活動が進路に与える影響の要因

1つ目の要因は、現地でのエピソードである。これはある現地での経験が直接的に次の進路を考えるきっかけになっていることを意味する。例えば第3章で述べたFやLが当てはまる。また、もともと建築や都市計画に興味があったNは2度目にボランティア行く際、日本のどのような技術が現地の発展に活かせるのかという視点を強く持っていた。Nの現地で感じた問題意識の先には公共交通機関の不足、そしてそれが引き起こす人々の機会損失であった。そんな時、現地の人から聞いた話が彼女の興味を鉄道に向かわせた。

N：「現地の人に、日本の鉄道っすごいいって話を聞いて、私は確かになって思っ。でも今まで鉄道のことをそんなに考えたこともなかったんで、それが一番日本の技術提供として最適かっていうのはわかんないんですけど、ちょっと調べてみたいなって思っ。それから鉄道に関するインターンを2つやって。それで研究テーマも、日本の鉄道にして研究してました。」

Nは現地の人から鉄道の話を聞いたことをきっかけに鉄道に興味を持ち、帰国後に世界銀行、途上国の鉄道を手がける日本のコンサル会社でインターンを行った。その後も鉄道に関わる仕事がしたいということで、商社、JICA、鉄道会社を中心に就職活動を始め、最終的にファーストキャリアとしてどこの部署でも鉄道を専門的に学ぶことができる鉄道会社に進路を決めた。専門性を高めた後、商社やJICAなど世界で活躍できる舞台に行きたいという。

2つ目の要因は、現地でのボランティア活動によって広げた新たなコミュニティの存在である。これにおけるボランティア活動は、活動した学生に新たな興味や疑問を感じさせ、それに関連したコミュニティへの参加のきっかけづくりする機能を持っている。つまり、ボランティア活動がなければ、広がらなかったコミュニティに今の進路が大きく影響されているということである。これにはA、B、Eなどが当てはまる。Aの場合、もともとアフリカの開発に興味があったが、現地で活動した後、自分は現地の人のことを知るこ

とが楽しいと感じるということに気づき、興味は自分が知る、かつそれを人にシェアできる「取材」ということに向かった。実際に途上国の情報を自らの取材と記事を通して発信する NPO に参加した。就職活動では WEB サービス会社の営業職として働くことが決まっているが、その理由をこう語る。

A：「扱ってるものが情報になるから自分がコンテンツ用意して伝えるってこと自体は面白そうって思った。今行く会社が国際協力とかアフリカとかに特化してるってことでは全然ないけど、ゆくゆくは自分でコンテンツ持ってメディア作ってことができれば面白いなっていうビジョンを描いたりもした。」

A は副業として NPO での「取材」を続けつつ、将来的に自分自身で大好きなアフリカを発信できたらという思いがあるという。そのために NPO では本当にやりたいことをやり、会社は自分が将来やりたいことのスキルを身につける場所と捉えていた。

E もその一人であり、学生ボランティアとして 2 度現地で活動を行った。E がそれを経験して感じたことは、政府の視点から見る現地の課題はどういうものなのかという疑問であった。学生団体の活動では、一般市民や貧困に苦しんでいる人を対象として、いわゆる草根の活動を行う場合が多いが、国を先頭に立って動かす政府の人と関わる機会はあまり少ない。そういった思いから、E はマラウイで国連ボランティアに半年間参加した。この経験がその後、大学院に進学することにつながったという。

筆者：「どうして大学院に行こうと思ったの？」

E：「自分が進路選択をするタイミングで周りに大学院に出てる人が多かったから。マラウイに行ったタイミングで自分のルームメイト全員が進学中の人か、進学をこれからする人とか、大学院終わってからインターンで来てる人達が多かった。それに感化されたのもあったし、自分の中ではっきりしてなかったものをもうちょっと自分でわかるようになりたかった。」

大学院では、社会構造や国の政策がいかに、市民レベルの具体的な課題に合うよう出来るかを研究したいと語った。これは国連ボランティアで、国連のような上の機関がいかに市民を動かしていけるかということを常に考えていた経験がもととなっていた。

このように現地での経験が新たなことへの興味を生み出し、Aであれば取材ができるNPO、Bは3章でも述べたように教育系インターン、そしてEであれば国連ボランティアという新たなコミュニティへの参加に影響し、そこで得た人とのつながりや新たな知識が、次の進路選択を行う際に影響を及ぼしているのである。

3つ目の要因は学生団体という組織の中で感じた価値観である。Kはその一人で、以前から宇宙開発に興味があり、現在の研究室も宇宙関係の仕事に就くことを考慮して選んだ。しかしリアルな宇宙開発の現場の厳しさや、そこで働く環境が自分に合っていないと感じ、その道を諦めた。というのも、Kが学生団体の活動の中で大事にしていたことをこう語る。

K：「人間関係みたいなところは自分自身気にしてた、というか考えようとしてたところで。まあやっぱ1人1人の考えとか個性はちゃんと尊重した上で一緒に向かえる部分を探す、で、モチベートしてあげるっていうのはすごく心がけてて。」

1人1人が様々なことに興味を持ち、モチベーションが異なる学生が集まる学生団体の活動で、いかにメンバーをモチベートしていくかという声は組織の中での葛藤として多く聞こえた。Kは前から人の役に立ちたいという思いを持っており、高校までのサッカーやワールドフットでの活動を通してその思いは強くなったという。その思いと同時に、1人1人が同じ目標に向かっていく重要性を感じ、それを実感しつつ、チームマネジメントを若いうちからできる会社で働きたいと思ったと語る。

K：「メンバーの1人1人の活躍とかって言うんですけど、そういうのを実感しつつ同じ方向に向かってやっていく環境とか、誰とやるかみたいなのになんてすごく影響されて。（省略）そういう自分が大切にしていることができる場所ってなんだろうって色々考え始め、今の会社を見つけて調べたりもしたら、どうやら目がギラついた人たちが目標に向かって一緒になってやっている、社会変えようって本気になってやってる、社員1人1人が同じ方向を向いているっていうのを割と感じて。」

学生団体は学生によって運営され、メンバーがいなければ、続いていくことができないため、モチベーションが様々なメンバーを一つの方向性に向かわせるというチームマネジ

メントが非常に重要になってくる。もちろん、途上国で活動し、個々人がそれぞれ学ぶことはあるものの、それだけではなく学生団体が学生に組織について学ぶ機会を与え、ある学生にとってはそれが成長や進路に大きく関係してくることが分かった。

## 2. 学びや価値観の変化と社会への適応

インタビューの中で、ボランティア活動全体を通して学んだことや変化した価値観について聞いたところ、各々が様々な意見を持っていた。直接的にその学び・価値観が進路選択に影響していたと考えられる学生は少ないが、そこで得たものは今後社会に出た時に、様々な人と出会い協働する中で発揮されるのではないか。

まず多くの学生から聞こえたのは、「常識」について考えさせられたということであった。A や H、K は文化や経済水準、家庭環境が全く異なる人と接し、自分の中で変わった価値観、考え方をこう語っている。

A：「マラウイで勉強したのは、前提はない。コミュニケーションをすごく丁寧にとったほうがいいってこと。お互い感じ方とか違うっていうのを念頭に置いて逐一確認をしていくこと。」

H：「インド人と関わるのってすごい難しいなっていう、日本の常識で関わってたらまともな精神保てないなみたいな。インドスタンダードで考えて動いた方がいいし実際そうしてた。小さいことでも。」

K：「人によっていいとか悪いとかっていうのは全然違うんだなっていうのを感じて。だから余計に、自分の価値観を押し付けるとかじゃなくて先入観を持たないとかはすごく変わりました。」

また、C は学生団体の方向性についてメンバー内でのぶつかり合いの中で、常識への考え方や自分自身の変化についてこう語る。

C：「実際入って衝撃だったのはメンバー内でもめた時に、私はあるメンバーの意見が全く理解できなくて。根本的に違う人間がこんな身近にもいるのに国違ったらそりゃあ

違うし、ほんと常識ってすごい凝り固まったものだなってというのは思ったね。同期が仲いいが上に違いにびっくりしたし、人って違うんだなって思った。最終的に結論を出さずに違うんだよね、で終わったのが衝撃的で、違っていいんだっていう、お互いの違いを尊重しているところがすごい好きで、それからは相手と違うってことを全然怖くなくなった。」

現地で、価値観が異なる人々と接する中で覚えた「常識」への疑問の投げかけだけではなく、学生団体は、学生に組織の中でのメンバーとのぶつかり合いを通して既存の「常識」への問いかけをさせる役割を持っている。

また学んだこととして、「プロジェクトを行う時間外で現地の人と交流することが、お互いの信頼を得るには大切である」という意見も多かった。

D：「現地の人と接して思ったのは、こっちは助けに来たんだからあなたたちは指示通り動いてください、みたいな態度でいても向こうは動いてくれないなって思った。むしろ作業以外の交流が大切というか。例えば村の男の子たちがサッカーしてるのを見てたら、一緒にやろうよって誘われてやってたのね。その子に明日作業やるんだって言うのと来てくれるし、別の村では、こっちが話しかけに行っただけの日はどうも心開いて活動に積極的になってくれたりしてたから。やっぱり国際協力の中で一番大事なのは、何かをやってあげるとかお金出してあげるとかいうよりかは、人との交流っていうところが結構大事なんだなっていうのを学んだ。」

I：「インタビューやるにあたって3回目は村長に村人を集めるように頼んで、お菓子とか配って、関係ない話から聞きたいことを聞いて仲良くなって。2回目は上からいく感じ、僕らにできることある？みたいな感じで聞いて、深いことは聞けなかったんだけど。3回目はとりあえずこの人たちと仲良くなりたいと、と思って。朝、雨季にしかできない池でやる漁について行ったりして。それ終わった後とかは、元気かお前って言ってくれたりとか。」

J:「一緒にお酒飲んで話したり、言葉は通じないけど無理矢理現地の人の遊びについていくみたいなすごい体当たりで、身振り手振りで挑んでいく姿勢みたいなのが結構相手と対等になれるし大事だなんて。」

こういった彼らの気づきには、約2週間という期間の中で、プロジェクトがうまく進まないことや自分の役割を全うできなかったことなど、様々な側面において悔しい思い、不完全燃焼感を感じ、次に現地を訪問するまでにそういった思いを克服するために反省点と改善策を思考錯誤し、次の現地訪問に望み、重要なものに気がつくというサイクルが存在していた。

今回インタビューをした学生の多くは、将来的に海外で働くチャンスがあればいいということを語った。海外で働いた時にはもちろんのこと、同じ国の人と働く中でも、一度自分の中の常識を取り払って、相手の意見を尊重するという姿勢や仕事をする仲間同士で信頼を得ることは非常に重要なものであるだろう。こうした「常識」や「信頼関係を築く」学びや価値観の変化が社会に出た時にどんな意義を持つかということ、グローバル人材という視点から検討したい。

グローバル人材という言葉は21世紀以降に多く使われるようになり、グローバル化が進む中で、世界的な競争に日本が勝ち抜けていけるように、国際社会でも通用する人材を育てることを目的に、国の政策や経済団体などで使われるようになった。経済産業省や文部科学省はグローバル人材の定義についてこう述べている。

グローバル化が進展している世界の中で、主体的に物事を考え、多様なバックグラウンドを持つ同僚、取引先、顧客等に自分の考えを分かりやすく伝え、文化的・歴史的なバックグラウンドに由来する価値観や特性の差異を乗り越えて、相手の立場に立って互いを理解し、さらにはそうした差異からそれぞれの強みを引き出して活用し、相乗効果を生み出して、新しい価値を生み出すことができる人材<sup>(6)</sup>

世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までを視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間<sup>(7)</sup>

このようなグローバル人材推進の動きによって、大学でも国際化が始まり、日本人の海外留学の促進や英語教育の強化、留学生交流の促進などを行うようになった。以上の定義を踏まえて、グローバル人材育成推進会議では、グローバル人材の必要な要件を3つあげた。1つ目は語学力・コミュニケーション能力、2つ目は主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、3つ目は異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティである。

インタビューの中でも、もちろん言語の重要性というのを聞くことができたが、それは多くの学生にとって第1に重要なことではなかった。なぜなら国際協力ボランティアでは、言葉を学ぶことが目的ではなく、言葉を使って現地の人と協働するということが必要になるからである。それは仕事の上でも同様、多様で異なる価値観を乗り越え、言葉も含めそれを理解して関係を構築することが必要であり、インタビューを行った学生の「常識」への考え方や、「現地の人とのコミュニケーションの取り方」の自分なりの理解は、グローバル人材にとって必要不可欠なものである。

また、2つ目の要素に関しては、学生が何度も現地へ足を運ぶ姿から読み取ることができる。ボランティア活動を行った時に、自分の中で不完全燃焼を感じたり、予定していたプロジェクトがうまく進まず、「後悔」や「リベンジ」という感情が生まれることで、また現地での活動に参加するということがあった。学生が海外へボランティアに行く際の渡航費・滞在費は約15~40万と、学生にとって決して軽い負担ではない。それにも関わらず彼らが何度も現地に足を運ぶ原動力は「悔しさ」にあったのだ。Aは1回目の渡航で言葉でのコミュニケーションの重要性を感じながらも、積極的に現地の人とコミュニケーションをとることができなかった。そんなAは再び現地に渡ることを決めた理由をこう語る。

A：「後悔を晴らすため。そしたら話を聞かなきゃ見えなかったところがたくさん見えてきた。例えばボランティアで先生が来て教えてることとか、ここの地域仕事ないんだとか、給食は村のみんなで少しずつ出し合ってることとか。そういうことを突きつけられた。なんで向こうの人たちが、雇用が欲しいって言ってるのか理由は聞けたから、ショックは大きかったし考えさせられた部分だった。」

1年間悔しい思いをした、言葉で会話をする、ということの後悔を晴らしたことで現地のより深い現実を知ることができたと同時に、現地の人に対する見方も変化している。また、DやHは1回目の渡航で自分の組織の中での無力さに後悔を感じていた。

D：「自分の中でリベンジっていう意味で行った。自分が不完全燃焼みたいなのを感  
てしまったところで、もしかしたら自分もっと活躍できるんじゃないかなっていう  
のもあって。」

筆者：「不完全燃焼ってというのは？」

D：「最初新人ってことに甘えて自分で積極的に何かをしなかったっていうのもあった  
し、全部言いなりになってたっていうのもあったから。」

筆者：「初めて行って辛かったことは何かある？」

H：「自分が活動に対してできることの小ささを実感したのが辛かったかな。チーム内  
の役割としても自分ができることは小さかったし、村に対して自分が今回したこと  
ってどれくらい役に立ったんだろうっていうのを考えたらこの活動の終わりってな  
んだろうっていうループに入り始めて。」

筆者：「じゃあその辛さがあって、帰ってきて自分の中で変わったこととかある？」

H：「もう一回行くことに決めたこと。悔しさと半ば責任もあったかな。その回に行っ  
た人の中で次も行くって言った人が2人していなくて。」

彼らの語りからはグローバル人材として必要な、納得するまで諦めないチャレンジ精神  
や、責任感といったことが感じられる。国際協力ボランティアをすることによって学生が  
自然とそういった能力、考え方を備えることができると考えると、学生国際協力団体はグ  
ローバル人材を生み出す1つの場所になり得るだろう。

また変わった価値観を直接仕事に活かしたいという意見もあり、そう述べたのはGであ  
った。Gは中学生の頃から警察官を志し、そのために大学で法律を専攻した。進路と学生  
時代の活動はきっぱりと分けていた、というGであったが、警察の仕組みや現実を知るう  
ちに自分の中での警察官の理想が崩れ、大学3年の冬頃には進路が白紙になっていた。そ  
の後、Gに新しい価値観や語学やリーダーシップなどのスキルを与えてくれたインドとい  
う土地でNPOの活動をしようという考えもよぎったが、両親への思いから高い給料が得

られる、そして勉強が好きだったため勉強ができる場所を軸に就職活動を始め、コンサルティング会社への内定を獲得した。そんな G にボランティア活動によって変化した価値観を聞くと、その価値観と、そして今後どう活かしたいかということを語った。

G：「人というのが楽しいって思ったかな。インドに行って見ず知らずの自分に優しくしてくれたりとか、自分が思ってた以上に深く関わってくれるインド人、日本人に出会って、かなり自分の中の人に対する期待値、興味とかは上がった。多分この先コンサルとかの割と実力主義の社会にいたとしても、自分が最初に見るのは相手の気持ちとかだと思うから、自分が特に個性として持ってる強みは人に対する興味とか愛着で、それがこの先の人生でも生かされるんだろうなっていうのはほぼ確信的に思っていること。」

G はあえて人材業界のような人と深く関わるような仕事には就かず、実力主義、そして感情よりも論理的思考が必要されるコンサルティング会社を選んだ。そんな中で自分しか持っていない人への興味や愛着という強みを生かそうとしている。

今回のインタビュー全体を通してみると「現地のために」という意見よりも自分が何を得たか、という意見が多かった。これは学生が行う国際協力が特徴的である点にある。というのも、国際機関や NPO、NGO が行う国際協力には、期間内に数字で結果を出す必要性や、モニタリング、フィードバック、そしてドナーへの説明責任が伴う。しかし、学生による国際協力はそれらが存在しないため、他国の発展を促す活動ではあるものの、自己実現や自己成長としての意味合いが強いと考えられる。また、国際協力ボランティアは学生が次の進路選択をする際、直接的にせよ間接的にせよ 1 つの考える材料となっていることもわかった。そしてそこで得られた「学び」や「価値観の変化」はその後社会に出て様々な人と関わる中で発揮され得る能力となっている。その能力がまた新しいキャリアを生み出すかもしれない。そうした意味でも国際協力ボランティア経験は進路選択だけでなくその後の人生のキャリア全体につながるものとなるだろう。

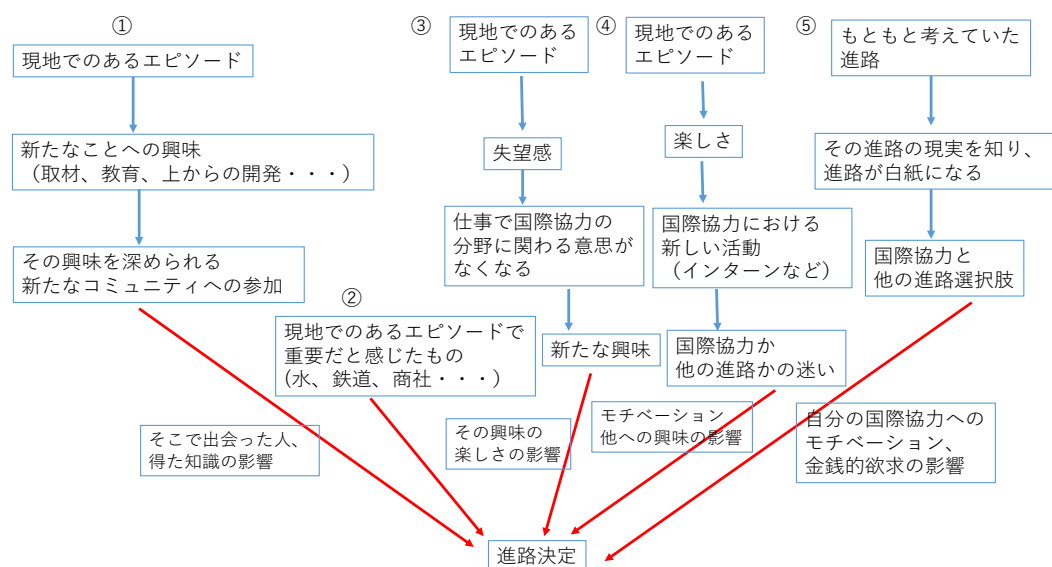
## 第5章 結論

本稿では、学生のボランティア活動が進路選択やキャリアを考える際に何らかの影響を及ぼすという仮説を立て、実際に学生国際協力ボランティアを取り上げ、その活動がどのように進路選択に影響するかということについて検討することを目的としていた。

第2章ではボランティアの参加動機における先行研究から、ボランティアはボランティアを行う側の人々にとって、利他的な意味合いよりも、自己実現・自己成長の意味合いが強いということが明らかになった。

第3章では学生国際協力団体に所属し、実際に現地で活動をしたことのある学生に、行く前の途上国や国際協力へのイメージ、現地に行って変化した考えや思い、その後の進路選択をどのように行ったかを中心にインタビューを行った。まず参加動機については、国際的なことを学ぶ学科に所属していた学生はもともと国際協力や途上国に興味を持っており、実際にその現場を見てみたいという体験思考の声が多く聞こえた。一方で理系の学生などは机上の勉強だけではなく実践的に学べる場としてボランティア活動を捉えていたり、たまたま知って新しいことにチャレンジするのにその団体が最適だったという意見が多かった。

図3 国際協力ボランティアと進路選択の関係性



(筆者の分析に基づく)

そして国際協力ボランティアがどのように進路選択に影響を与えていたか、について整理したものが図3である。本稿ではボランティア活動を「自らの自発的な意思で行う、金銭的な対価を主たる目的としない、他者や社会のため、かつ自らの成長になりうる活動」と捉えていたため、今回インタビューを行った学生のボランティア活動も、活動自体の目的としては、現地の人や社会のためという部分には共通点があった。しかし実際のインタビューにおいて、組織の中では現地の人や社会にどういったインパクトを与えたかについて振り返りをしていたが、自身の振り返りの中では、自分がそこで感じた興味や疑問、反省点などを考えていたという意見が多かった。

ボランティア活動が学生の進路選択にどのように影響しているのかを検討すると、現地での活動から進路決定プロセスには5つのパターンがあることがわかった。まず①のパターンでは、現地での経験を機に何となく興味を持ったものを、帰国後その興味を深めるために新しいコミュニティに所属し、それが進路選択の最終的な影響力となっているという点から、国際協力ボランティアの経験は、自らの新たな興味を引き出し、最終的な影響力に近づくためのきっかけになっていることが明らかになった。②のパターンでは直接的に国際ボランティア活動を行う中での経験が進路選択につながっている。③のパターンで、「失望感」を覚えた学生は、もともと仕事として国際協力の道に携わりたいと思っており、それに対する大きい期待があった。しかし実際の現場を見て感じた「失望感」はそのような学生に、将来仕事としての国際協力の選択肢を消し、新たな興味へ向かわせるきっかけになっていた。④のパターンでは、現地の人との交流や協働、自分たちの活動自体が「楽しい」という感情からさらに国際協力への興味をもたせ、最終的に進路選択の材料になっているという点で影響を及ぼしている。⑤のパターンでは、もともと興味があった別の進路とボランティア活動を、進路を考える上で分けていても、現地が好きだ、という気持ちなどを理由に最終的に国際協力の道が進路選択の材料の1つになっていたという点で影響を及ぼしている。

そしてその結果をさらに大きく捉えると、仕事として国際協力が続けようという意思がある学生と、その意思が全くない学生の2つの進路選択に分けることができる。その分岐を促しているものは「その活動を意味のあるものとして捉えているか」ということであった。国際協力続ける意思があった学生は「意味のあるもの」を「やりがい」捉え、それが続けるためのモチベーションになっていた。では、何にとって意味のあるものなのか、という点については、「現地の社会や人」と「自分にとって」の2つに分類できる。「現

地の社会や人」については、現地の人の生活が良くなっていることを実感したことがやりがいになっていた。「楽しさ」については、仲間と活動を行うこと、土着で現地を盛り上げることで、現地の人と関わることで、現地を知ること、などその学生によって意味づけは異なるが、いずれにせよその楽しさがやりがいとなっていたからこそ、続けるという選択肢が生まれたのである。また、国際協力を続ける意思が全くない学生の多くは、国際協力の現実に「失望感」や「諦め」を感じており、一度感じたその感情が、その活動を進路選択において重要な考え方である「意味あるもの」、「やりがい」として捉える前に、仕事として国際協力はしないという一種の先入観を生み出している。

また、学生国際協力団体の意義と限界についても検討することができた。まず意義としては、学生がより気軽に途上国での国際協力に関わるという機会を提供できるということがある。その理由は長期休みなどを利用した短期間、エージェントなどを通さないため最低費用で途上国へ信頼した仲間と行けるというところに大きな理由があるだろう。また現地の人とプロジェクトを成し遂げるために、学生は現地で使うための言語をすること、さらに現地の人と協働する中での葛藤を乗り越えることで「常識」や「うまく現地の人と関わる方法」を自分なりに解釈しているという意味で、グローバル人材を育成する機能を持っているということがある。一方で、限界については、今回 15 人中 4 人という高い確率で学生がリアルな国際協力の現場に失望感を抱いていたことから明らかになった。学生団体の活動の一環の中で、学生が現地で活動できる期間は 1~2 週間と少なく、1 度現地への失望感を感じてしまうと、そこから「なぜ」そうなのか、という部分まで深めることができず以前は国際協力で働くことを目指していた学生もそこから離れてしまう。そこに学生国際協力ボランティアの限界が存在している。

もちろんそのような気づきやきっかけ作りは国際協力ボランティア、という形でなくても留学や途上国への旅行でも気づけたことかもしれない。しかし進路選択における学生国際協力ボランティア、もしくは学生国際協力団体の意義というのは、国際ボランティアは、派遣される前、派遣中、そして派遣後においても、様々な思いを巡らし学習している存在である[内海 2011:37]という点にある。つまり、現地での活動の中で何らかの経験をし、それについて考え、次に現地へ渡る半年~1 年間の中で報告会を行い、そこで自らの学びや、活動の今後の方針を団体の仲間と客観的に考える機会が設けられている。そして次の活動に向けて自らの目標を立て、望むのだ。そういったサイクルの中に学生は常に身

を置くため、進路選択をする上でも現地でのボランティア経験が多くの学生にとって影響を及ぼしているのであろう。

ただし、進路選択というものは、4年間という大学生活にとどまらず、それまで生きてきた中での様々な経験や学習を踏まえた複合的な要素が絡み合っている行為であるため、ボランティア経験は進路選択において1つの要素に過ぎない。例えば、今回のインタビューの中で仕事を選ぶ際、「海外で働きたい」という意志がある学生が多くいたが、それはそれまでの人生の経験に基づいた海外への興味に裏付けされたものである。また自分の福利厚生への欲求は家庭環境や周りの人に影響を受けたものであろうし、自分のやりたいことは過去の経験のつながりから出てきたものだろう。また性格も関係していて、もともと人と話すことが好きだったのか、じっくり腰を据えて考えることが好きなのか、そういった、ボランティア活動での経験や学びも含め、過去から現在までの様々な要素が組み合わさった中で、自分にとって1番納得できる中央の点が進路選択の結果なのであろう。

最後に本稿の課題を整理する。今回、インタビュー対象団体は6団体で、それぞれの団体の行う活動、対象としている人々には差が大きく、例えばある学生は現地に対してすごく貧困を感じた、ある学生はあまり感じなかった、また「たまたま相手がよかったから今こういう風に思っている」というように対象としていた地域や人への感じ方も進路選択には影響を及ぼしているため、今回の結果が必ずしも普遍的なものとは言えない。また、調査対象の学生においても役職の違いにおいても注意を払わなければならなかった。やはりリーダーを務めている学生ほどその団体の活動に対する思い入れは強く、活動への関与が深い学生ほど学生時代にその活動に費やす時間も長いため、進路選択あるいは今後のキャリアに能力という面でも影響してくるからである。以上を踏まえて質的調査の改善を今後の目標とする。

## 注

- (1) 文部科学省中央教育審議会ホームページ

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1287510.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1287510.htm)(2019/12/14 参照)より。

- (2) 日本 UNICEF 協会ホームページ

[https://www.unicef.or.jp/about\\_unicef/about\\_mis.html](https://www.unicef.or.jp/about_unicef/about_mis.html)(2019/1/7 参照)より。

- (3) 厚生労働省ボランティア活動ホームページ

[https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/seikatsuhogo/volunteer/index.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/volunteer/index.html)(2019/12/16 参照)より。

- (4) 独立行政法人 国際協力機構 JICA ホームページ

<https://www.jica.go.jp/aboutoda/whats/cooperation.html>(2019/11/24 参照)より。

- (5) 日本財団学生ボランティアセンターホームページ

<http://gakuvo.jp/about/newsrelease/>(2019/11/24 参照)より。

- (6) 経済産業省グローバル人材育成委員会ホームページ

[https://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san\\_gaku\\_ps/global\\_jinzai.htm](https://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_ps/global_jinzai.htm)(2020/1/7 参照)より。

- (6) 文部科学省ホームページ 「グローバル人材の育成のための戦略ホームページ

[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_\\_\\_icsFiles/afieldfile/2011/06/01/1301460\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/___icsFiles/afieldfile/2011/06/01/1301460_1.pdf) (2020/1/7 参照)より。

## 参考文献

荒井俊行

2017「青年期のボランティア活動への参加行動・不参加行動を規定する要因」『早稲田大学人間科学研究科学位論文』。

E.G Clary

1998 Understanding and Assessing the Motivations of Volunteers: A Functional Approach. *Journal of Personality and Social Psychology* 74(6) :1516-1530.

古田克利

2018「学生生活の意味ぶかさと職業観およびキャリア意識との関連-人文系初年時学生を対象として-」『キャリア教育研究』 37:1-10。

伊藤忠弘

2011「ボランティア活動の動機の検討」『学習院大学文学部研究年報』 58:34-55。

川田虎男・志塚昌紀

2016「ボランティア活動が学生の自己肯定感に及ぼす影響：大学生ボランティアのヒアリング調査より」『聖学院大学総合研究所紀要』 61:89-123。

国際協力事業団

1995『国際協力概論-地球規模の課題-』国際協力出版会。

黒沢幸子

2008「学校教育支援ボランティアを体験した学生の変化・成長：その様相とキャリア教育の視点からの考察」『目白大学心理学研究』 4:11-23。

松井みさ・谷本満江

2012「ボランティア活動における学生の意識変容について(Ⅲ)-卒業生への聞き取り調査より検討-」『中国学園紀要』 11:49-55。

松岡・小笠原

2002「非営利スポーツボランティアを支えるボランティアの動機」『体育の科学』 52:277-284。

森下佳奈

2016「『米国 NPO インターンシップ』評価研究-アメリカ社会でボランティア活動を行った学生の意識・行動変容と進路選択の調査-」『愛知淑徳大学論集、交流文化学部編』 6:81-97。

岡本栄一

2014 『ボランティアのすすめ-基礎から実践まで-』 ミネルヴァ書房。

桜井政成

2002「複数動機アプローチによるボランティア参加動機構造の分析-京都市域のボランティアを対象とした調査より-」『The Nonprofit Review』 Vol.2, No.2, 111-122。

2007『ボランティアマネジメント-自発的行為の組織化戦略-』 ミネルヴァ書房。

妹尾香織

2008「若者におけるボランティア活動とその経験効果」『花園大学社会福祉学部研究紀要』 16:35-42。

下村恭民・辻一人

2009『国際協力新版-その新しい潮流-』 有斐閣選書。

高木修

1997「援助行動の生起過程に関するモデルの提案」『関西大学社会学部紀要』 29(1):1-21。

谷田勇人

2001「福祉ボランティア活動をする大学生の動機の分析」『社会福祉学』 41 2:83-93。

内海成治・中村安秀

2011『国際ボランティア論-世界の人びとと出会い、学ぶ-』 ナカニシヤ出版。

2014『新ボランティア学のすすめ-支援する/されるフィールドで何を学ぶか-』 昭和堂。

## Summary

### The effect of student volunteer experiences on career selection. -Case study of overseas cooperation group by students-

The aim of this thesis is to clarify how the experience of students volunteer effects their career selection. A lot of students have been participating in volunteer since the Han-Shin Awaji earthquake disaster in 1995. The reason for their participation is not only to help people or society but also self-realization and self-growth. It is also said that volunteer experience would help the future design. However, few researches have been conducted about the relationship between volunteer experiences and career so far. Therefore, this thesis will clarify the relationship between volunteer and career through interviews to students who have been volunteer of overseas cooperation.

It is generally said volunteer has 3 necessary terms, which is initiative, complimentary and publicness. Initiative means the action by oneself. Complementary means that the main aim of volunteering is not economical reward. Publicness means that the aim of volunteering is not only self-interest but also social interest. There are more terms like creativity and pioneer characteristics, reciprocity, self-growth, continuity. In recent years, the form of the volunteer has many types by the appearance of paid volunteer and the introduction to school education. This thesis defines volunteering which is changed every times as the activity, which are not intended with financial value, for others and society and oneself by voluntary intention.

Many study of volunteer participation motive has been conducted so far. Clary who is famous for the study of volunteer participation said volunteer has 6 functions, Values and Understanding, Social, Career, Protective, Enhancement. Values refers to expression of values related to altruistic. Understanding refers a function of getting new experience and knowledge. Social means getting new relationship with people. Career means getting something help for career. Protective means people can forget negative feeling. Enhancement motivates self-knowledge and self-development. According to the study focus on students, it is clarified that meeting with new people, learning, experience is more important than to help others to participate in volunteer for students. According

to the study to clarify what students learn and how they changed after volunteering, common keyword was self-growth and confidence.

The author has done 15 interviews to students who were belong to overseas groups and have been volunteering in the field mainly developing countries and decided to course after the graduation. Many students said about the reason of participation that they have had interested in international cooperation or developing countries so they wanted to see how the real is. Others said they regarded volunteering as a chance of practicing with learning at university or they happened to know the group.

The interview revealed 2 things to the aim of this thesis. Firstly, the experience of volunteering effects directly or indirectly to students career selection and the pattern was classified 5 patterns. There are 3 factors to effect, that are volunteer experience and new community related to their interests from volunteering experience, the new sense of values they learned in the groups. Secondary, the learning through the overseas cooperation volunteer related to not only career selection but also hole career. Especially many of students have reconsidered about common senses and learned how they build trust with them through working with local people who have different culture. These two learning are very important for working with foreigner even though Japanese in the future.

However, the experience of volunteer could be one of factors of career selection for students because career selection is an action caused by lots kind of experiences and learnings from the past until now.

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、本当に多くの方にお力添えを頂いた。この場を借り、感謝の意を示したい。

まずは、本稿の執筆に際してご指導頂いた関根久雄教授に御礼を申し上げたい。関根教授には3年次からゼミ生としてお世話になり、本稿の執筆にあたってはテーマの制定や執筆のアドバイス、添削に至るまで支えていただいた。本稿の執筆が途中で行き詰まり、相談に乗っていただいた時には、いつものような優しい笑顔で冗談を交えながらも、的確にアドバイスをしてくださり、私のやる気をいつも出してくれた。

またゼミ生にも感謝を申し上げたい。同じゼミの仲間として毎週議論を交わし、1人1人の異なる考えを聞くことで自分の視野を広げることができ、そうしたゼミは純粋に学問における議論が楽しいと思える場所であった。そして独立論文や卒業論文においても、互いに切磋琢磨しながら励ましあうことで乗り越えることができた。

続いて、本稿の執筆に不可欠であったインタビュー調査にあたり、インタビューを引き受けていただいた15名の学生の皆様、私と同じように卒業論文や進路の準備などでお忙しい中、1時間近くにわたって快く質問に答えてくださったことに心より御礼申し上げます。私も学生ボランティアとして途上国で活動していたため、共感できる部分が多々あり、インタビューをさせていただいている私自身も楽しませていただいた。そしてインタビューを引き受けていただいた方をご紹介くださった学生の皆様にも感謝を申し上げます。

最後に、私の学生生活を常に支えてくれた家族に感謝申し上げます。大学で何不自由なく勉学に励めたことはもちろん、不安がある中でも私の意思を尊重し、大学生活で私が成長する上で非常に重要であった海外での経験をさせて頂いた。

改めて、本稿の執筆にお力添え頂いた皆様に感謝の意と敬意を示し、本稿の結びとする。